〔表紙写真解説〕

表紙写真は南海部郡大字上津川字猿谷（さるや）にある石風呂である。バスの終点「しもこうづかわ」の対岸で、バス停から二〇〇㍍ばかりの所にある。

県下の石風呂の多くが、主として石室を伴うサウナ型式であるのに比べ、この石風呂は、簡単な露天の浴槽型式のものである。周囲の景観はすばらしく、人工の名園の一角にしつらえられた、という感じがする。

下上津川の民家のはずれ、道路下四㍍、幅一〇㍍ばかりの谷川に、左の山側から突き出た岩が中央まで迫り出した場所である。この岩の上流側は七―八〇㌢の壁になっているが、下流側は少し平坦で、その中に格好の大きな窪みができている。

この岩の窪みに手を加えて、さらに大きくしたのがこの石風呂で、縦は約二九〇㌢、横は中央で約九〇㌢、両端近くで約四〇㌢、深さは四五～五五㌢とかなり大きな容量のものである。

この石風呂を中心として上下五～六〇〇㍍ばかりの間には、かつてはセキショウの群落で覆われていた。しかし、昭和十八年（一九四三）の大洪水で失われ、以後再生していないが、最近、村文化財指定と合わせ、復元の話が進められている。

この石風呂がいつ頃作られたものか、はっきりしていない。弘法大師が近くの井内薬師を訪ねたとき、ここで湯浴みして旅の疲れを癒したといい、地元では大師風呂と呼んでいる。古老の話では、明治以前から引き続き、昭和十八年頃まで使われていたという（猿谷の石風呂を現地調査をした矢野徳彌氏の「猿谷の大師風呂」〈『二豊石造美術No.19』大分県石造美術研究会　一九九九・三〉より引用しました）。

表紙写真は平成十二年七月十三日（木）、佐伯史談会員十一名が猿谷の石風呂復活実験を見学した折、本匠西小学校の児童が楽しそうに、十人ほどが入り初めをしたときの写真です。

（矢野）